

根付コレクションの研究動向など

「根付」は男性が煙草入・印籠・矢立などを腰帯から提げる時、滑り止めとして用いられました。その言葉が文献で確認されるのは寛文十一年に出版された『宝蔵』まで下がりますが、近世の初頭には使用されていたことが画中資料などから窺えます。江戸時代の終わりには、実用性というよりも素材の妙、彫刻の精緻さ、主題のおもしろさなどを楽しむことのできる小さなフィギュアとして求める人が増え、膨大な数の根付が作られました。

ところが根付は開国後、それまでに作られていた古作も、新たに作られたものも含めて貿易品として盛んに輸出されたため1981年、大阪市立美術館が七百五十点の根付を購入した時には、国内には殆ど残っておりませんでした。同年刊行された美術雑誌『三彩』に掲載された西里信夫氏の一文によれば、日本で根付を所蔵していることを公表していた主な美術館・博物館は十一館、その総数は八百点に過ぎないとあります。江戸時代に大量に作られた根付は、開国後百余年の間に海外のコレクターや美術館・博物館の所蔵となってしまっていました。

なぜそのようなことが起こったのか、一因は日本の開国と同時に起きた日本美術ブームにありました。日本政府が外貨獲得のために古美術品を輸出し、海外の市場に向けて新たな美術工芸品の製作を奨励したため、1878年のパリ万国博覧会の前後をピークに欧米における日本美術ブームが一気に高まりました。パリでは新興ブルジョワジーがこぞって日本の美術品を購入しました。日本の美術品のなかでも根付に人気があったことは、日本美術愛好家ルイ・ゴンスの著“L'Art Japonais(日本の美術 1883年)”にも書かれています(図)。また近年英国で出版されたエドモンド・ドゥ・ヴァール著『琥珀の眼の兎』は、まさにその頃、パリの銀行家で美術品コレクターでもあったシャルル・エフルツシが蒐集した根付が、ナチスドイツによるホロコーストのなかを生き延び再び日本にたどり着くという数奇な運命を描いてベストセラーになりました。

根付が開国と同時に海外に盛んに輸出されるようになった理由にはもう一つの説もあります。横浜で貿易商となった三河屋幸三郎という人物が関わっていたという話です。井戸文人著『日本囊物史』(1919年刊)には、帝室技芸員であった竹内久一談として、また大阪市立美術館に戦前在職し根付研究に携わった上田令吉著『根付の研究』に

もあるエピソードが書かれています。江戸の袋物商辰巳屋で奉公していた三河屋幸三郎が店を出て、下田で土工をしていた時、たまたま出会ったアメリカの艦船の乗組員と知り合い、それをきっかけに開国と同時に根付提煙草入を輸出することを始めたというのです。二人の書いている内容は微妙に異なり、上田氏の記述は出典が明らかでは無く、風説にすぎないのかもしれませんが。しかし三河屋幸五郎をはじめ、武蔵屋大関弥兵衛など開港後、美術工芸品を売買して著名な貿易商となった人々の多くが開国以前には江戸で根付・煙草入など袋物の商に従事していたのも事実ですので、袋物商転じて横浜貿易という流れはあったはずで

す。このようにして海外に輸出された根付ですが、日本経済の発展とともに日本への逆輸入が始まりました。特に1980年代の後半から1991年の2月まで続いたバブル景気の時期には、海外のオークションに日本のディーラーやコレクターが積極的に参入し、作品を落札することも日常的になりました。海外根付コレクターと日本のコレクターの交流も盛んになり、根付を展示する機会も増えました。そのため日本国内における根付愛好家も増加し、また現代根付の製作も続けられ、近年はフィギュアブームに触発されて注目度も以前よりは高まっています。

しかし根付研究の進展は遅々としています。美術史の一分野ではありますが、印籠・緒締、袋物・金具・煙管・煙管筒など多岐にわたる器物と一具になっており、素材や技法や主題も多彩です。明治になってから輸出のために作られたものとはいえ、江戸の伝統を受け

継ぐ上質のものも多く、その区別は容易ではありません。そして未だに大量の根付が欧米に所蔵されており、調査には莫大な費用がかかります。そのためコレクターが研究者を兼ねる場合が多く、根付以外の日本美術史研究との連動性が希薄であったりもします。

大阪市立美術館のコレクションに根付が加わって三十年以上になります。国内から一歩も出ずに残された貴重な資料です。その間、作品の調査・展示は続けており、海外コレクションの根付に関するコレクションの特別展も予定しています。しかし今後のさらなる研究の進展のためには、デジタルデータの公開が急務であると考えています。

(土井久美子)



“L'Art Japonais”に掲載されたゴンスの根付